

## 池尾池のおくらさん

むかしむかしのことじゃった。

豊前の池尾谷の村に啓衛門という百姓がおったそうな。この啓衛門、すっかり年老いてしらがになっておったが、朝夕に池尾池のほとりにやって来て、池の水面を静かにながめてはなみだしていた。そして帰りしなには、池のそばの林の小さなお堂にそっと手を合わせて帰る毎日じゃったそうな。

その昔、この啓衛門には、おくらというむすめがおってな。それは美しいむすめじゃった。気立てのいいおくらは庄屋に奉公にでちよったが、村中でん親孝行もんで評判じゃったそうな。

そんなある日、領主様からおふれが出たんじゃ。

「大西の池尾谷にため池を造るよつに。」

ということじゃった。領主様の命令は絶対じゃ。大庄屋の西村文左衛門から話を聞いて、村の百姓たちは思案したそうな。

そのころのため池造りはなあ、土ほりから土運びまでの仕事はほとんどが手仕事じゃったき、ひどい苦役じゃった。けんど、水不足に苦しんできた百姓たちじゃったから、



「ひどいけんど、日照りになりゃあ、田は干上がったしもう。どげかきばろつじゃねえか。」

と言つて、みんなで力を出しおうて造ることになったんじゃ。百姓の啓衛門もその一人じゃった。

百姓たちは、はげましおうて仕事を進めたんじやと。人手も少ないころのことき、まんまる二年もかかって池尾池は完成したそうな。百姓たちは大喜びして、その年の田植えは笑い声が絶えんじやったと。

ところが、田植えもすつかり終わった六月、春から続いた長雨でとうとう土手が切れてしもつたんじやと。百姓たちは、肩をがっくり落としてしもつたが、やり直しをしたそうな。どげちこげちひどかつたけど、助けおうち仕事を進めたんじや。けんど、また失敗してしもつち土手はなかなかでけんじやった。文左衛門の家に集まっち、どうしたもんかとみんなで頭を寄せおうち考えた。そんな時、啓衛門が言い出したんじや。

「人柱ば立てたら土手はくずれんのんじやなかるうか。」

百姓の中には、同じことを考えちよつたもんもおつたけんど、だれも言い出せんじやった。人柱は土手を守るために、人を生きたままうめる世にもおそろしいことじゃけんのう。だが、あげやらこげやら話しちよるうち、とうとう人柱を立てることになつちしもつたんじや。

さて、だれが人柱になるか、くじを引くことになった。みんな家族がいる。目をつぶつて引くもんもおつたが、くじを引き当てたのは、言い出した啓衛門じゃった。ところがその話を、むすめのおく



らが柱のかけで聞いちしもうたんじゃ。おくらは、文左衛門の前に進み出て言った。

「だんな様、お願いでございます。家には、病にふせたばばさまと幼い妹、弟がございます。ととさんが人柱立てば後に残るもんは…。

このお役目は私が代わって努めますほどに、今すぐうめてくださいませ。」

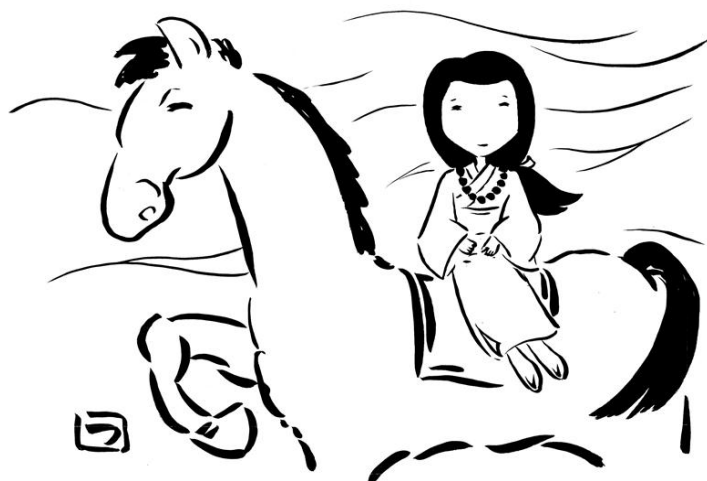
「何を言うか。若いおまえを先立てて、どうしておれがじっとしておらりょうか。」

啓衛門はおどろいてこう言った。しかし、なん時か話おつて、とうとうおくらが人柱に立つことになったんじゃ。

別れの日。白しゅうぞくで白馬に乗ったおくらはそれはもう神々しく、集まった村の人々は、あまりのいたわしさに地にふして合掌したということじゃ。

それからというもの、仕事はおどろくほどの速さで進み、秋には立派な土手が築かれたちいうことじゃった。

村の人々は、おくらのけなげさに心打たれて、池のほとりに小さなお堂を建ててまつたということじゃ。人々は、いつのころから啓衛門が、池のほとりにたたずんでいるのを目にするようになったそうじゃが、だれも声はかけれんじゃったそうな。



豊前市大西の池尾池の堤防の上には、小さなほころも建っており毎年田植えの時期じきになると守り神としてお参りまじする人が後をたたないそうです。

(土屋直子)



池尾池